

ご挨拶

謹啓 本日も弊社ホームページをご覧いただき、有難うございます。

弊社は、対馬市厳原町中村に鎮座する八幡宮神社所蔵の「高蒔絵三十六歌仙額」の調査研究報告書『高蒔絵三十六歌仙額』を出版するために、ささやかな個人出版社として1999年3月に設立いたしました。当時は、三十六歌仙額が総合的・系統的に調査研究されていなかった為に、この成果を出版できる出版社がありませんでした。

当初より社員は家族4名、4人がそれぞれに、内藤磐(和歌文学・早稲田大学国文学会名誉会員、他)・内藤典子(美術工芸・美術史学会、他)・内藤美奈(民俗学・日本民俗学会、女性民俗学研究会、他)・内藤亮(歴史及び考古学・歴史学研究会、日本考古学協会、他)が各分野での研究者であったため、今日まで『高蒔絵三十六歌仙額』『狩野松栄筆 三十六歌仙絵額 大生郷天満宮蔵』『住吉大社と三十六歌仙額』を、それぞれ3～5年間をかけて調査研究し、その「調査研究報告書」として出版・販売をしてまいりました。

1994年7月31日より8月6日に初めて対馬を訪れたのは、内藤磐の上代和歌の調査の為でしたが、帰路につく直前、八幡宮神社より依頼されて宝物庫に入った内藤典子は、そこに無造作に陳列されていた三十六歌仙額を見て、「これは途方もないモノかもしれない！」と直感したことを手帳に記し、その後「高蒔絵三十六歌仙額」と命名しました。これが三十六歌仙額を「祈りの総合芸術」と定義づけるに至った、偶然の出会いでした。

『高蒔絵三十六歌仙額』については、早稲田大学より研究助成金を受けつつ、個人出費を続けながら5年間に10回対馬に渡島し、実地踏査を行いました。また各地の寺社の御協力、諸方の博物館・美術館の関係者の皆様の御協力を得つつ、5年間は瞬く間に過ぎてしまいました。旧・対馬藩の宗家、島内の菩提寺・萬松院、東京の菩提寺・養玉院、長崎県立対馬歴史民俗資料館、その他の多くの関係者のご協力を得て、『高蒔絵三十六歌仙額』を出版できましたことは、「次世代への文化継承」を目的として、調査研究および執筆・編集などに直接携わってきた、弊社各自の喜びでございます。

また更に、東京国立博物館収蔵の無指定であった「柴垣蒔絵硯箱」(古満休意作の極め有り)が、2003年に「国重要文化財」に指定されました。「高蒔絵三十六歌仙額」は、2008年3月31日に「対馬市指定文化財」になりました。

また文化庁の直接の御要請で、詳細な調査内容と『高蒔絵三十六歌仙額』とを共に、2018年12月に提出しました。「高蒔絵三十六歌仙額」は、全国唯一の江戸幕府お抱え蒔絵師である、古満休意の36面揃の“国宝級”の蒔絵でございます。国の重要な文化財として認められて、より良い保存環境と共に劣化を防ぐ処置が施されることを願っております。

皆様には、何卒ご支援のほどを御願ひ申し上げますとともに、今後とも御引き立て賜りますよう、なにとぞ宜しく御願ひ申し上げます。 謹白

静学堂 社主・内藤典子
代表・内藤 亮